

姉ちゃんの友達のギャルがオレの“フレンド”になるまで



■主な登場人物■

ユウ（主人公）

D T（童貞）男子校生。コンピュータゲーム好き。スケベ。

ミサキ（ヒロイン。美人 J D（女子大生）金髪白肌ギャル）

ユウの姉の友達。彼氏とケンカ中。

姉（ユウの姉。ミサキの友達）

用事ができた自分の代わりに、ミサキのゲームの先生になれと弟に命じる。

■目次■

- 1 プロローグ…………… 4
- 2 金髪白肌 J D ギャルのミサキさんは、姉ちゃんの友達… 6
- 3 彼氏あり美人でも二人きりでゲームするのは楽しい… 12
- 4 え、今、なんでもお礼してくれるって言った？…………… 19
- 5 姉ちゃんの友達は、アソコを舐め回されてイク！…………… 29
* クンニ C G …… 45

- 6 姉ちゃんの友達と、D T卒業正常位！…………… 51
* 正常位ピストン C G…………… 67 * 体験版は
* 正常位フィニッシュ C G…………… 75 ココまでです。
- 7 ミサキに彼氏を裏切らせつつ、品性下劣にバック姦！… 78
* バックピストン C G…………… 87 * 体験版には未収録。
* バックフィニッシュ C G…………… 105
- 8 エピローグ…………… 107
* 体験版には未収録。
- 奥付、CM…………… 111
* 体験版の「奥付、CM」は P79~です。

* 赤字はHシーンがある章です。

* P D F 版は、お使いのソフトのしおり機能で各章にジャンプ
できます。

しおり機能につきましては、お使いのソフトの説明書をご参
照ください。

対応していないソフトもあるかもしれません。

製品版のご購読前に体験版で具合をご確認ください。

1

「う～さぶさぶっ」

ある冬の日のことだった。

白い雲がばらけている青空から、明るい陽光が降り注いでいる。

御前田ユウはK学園に通う学生だが、今日は休日。

いつもはブレザーの制服で身を包む彼は、グレーのダッフルコートの下にウールの黒いセーター、それにピッチリした紺のジーンズという、ありふれた出で立ちをしている、

風はなく、雪は降っても積もってもいない。けれど、それなりに厚着して出かけたにもかかわらず、寒気は肌を刺すようで、まるで裸でいるかのような気分だった。

彼は白い息を吐き、両肩をさすりながら家路を急いでいる。

片方のワキには平たい紙袋が挟まれていて、小刻みに上下する手に引っ張られ、カサカサ音を立てていた。

「ただいまー！ おっとっ」

自分の声を聞いてあることを思いだしたユウは、慌てて口を塞いだ。

玄関から続く廊下の奥からは、人の気配がするが、騒がしくはない。

彼は胸をなで下ろした。

ユウの家は、街の中心から大分離れたところにあるマンションだった。

家族は両親と姉と自分の四人。父も母も仕事でいないが、大学生の姉はいるはずだ。

なんでも今日は、友達が来るそう。

時間をかけてなにかするらしい。邪魔だから、しばらく外出するか、家に居ても息を詰めてろと申しつけられている。

だから、うるさくしたらマズイ。

姉が怖いわけではない。

姉弟の仲は普通だと思う。

一緒に食事をするし、テレビゲームで遊ぶし、外で遊ぶときもある。

ただ、世間の姉や兄の例に漏れず、弟にやたら偉そうで。

今日は結構、強く釘を刺してきた。

二〇年近く、弟をやってきた者として、機嫌を損ねたら雷が落ちて面倒なのは目に見えている。

ワキの紙袋の中身に浮かれ、うっかり、いつもの調子でただいまなんて言ってしまったけれど、どうやら逆鱗に触れなかったらしい。

くわばらくわばら。

ユウは紙袋を大事に持ち直し、自分の部屋へ向かう。

だがそのとき、廊下から居間に続くドアが開いた。

「ちょっと、ユウ、こっちきな！」

顔を出し、かなり強めに呼んだのは他でもない、件の姉だ。
ユウは顔をしかめた。

2

げげ。

姉ちゃんを怒らせちゃったみたいだぞ。

オレことユウは、渋々リビングに向かった。

姉ちゃんと言うだけ言って、さっさとリビングに引っ込んだ。

どういうつもりで呼びつけたんだろう。

やっぱり、うるさくしたのが、かんに障ったんだろうなあ。

それしか思いつかない。

はあ……。

オレはこれから、紙袋の中身を……ゲームを貸す代わりに友達から借りたエロ本を、心ゆくまで楽しむつもりだったのに。

気分はかなり盛り上がった。

帰宅する足がほとんど、駆け足だったのが証拠だ。

くそっ。

姉ちゃんに怒られたら、そんな気分はしおれきるだろう。

とはいえ、覆水盆に返らず。

さっさと怒られちまおう。

ひと寝したら気分は変わるだろう。

その後こそ……ムフフ。

オレは気を取り直して、リビングに入った。

あったけー。

クリーム色の壁に、木の椅子にテーブル、テレビ、その他ラックなど、最低限の家具を備えた、どこの家庭でも見られるようなリビングは、暖房が効いていた。

外は冬だけど、ここはまるで春だな。

いや、夏か。

その原因は、姉と一緒にいる女性だ。

「おかえりユウ。悪いけど、頼まれなさいよ」

偉そうに言ったのは姉だった。

ちょっと先に生まれただけで、上から目線でいるこの女は、部屋が夏に思える原因じゃない。

なんだろう。

コートを着て、マフラーを首にしてるぞ。どっか出かけるのか？

まあ、姉ちゃんなんてどうでもいい。

「おっはー。ゆっち、元気してた？」

低めで明るい、大人っぽい女子校生みたいな美声で挨拶してくれたのは、姉ちゃんの友達の金森ミサキ（カナモリ ミサキ）さんだった。

うひょー、金森さんは今日も美人だぜ。

長い時間、姉ちゃんとなにかする友達というのは彼女だったのか。

オレの目は、姉ちゃんの友達に吸い寄せられた。

だって、すげえ美人なんだぜ？

彼女は姉ちゃんと同じ大学に通っていて、つまり、JDというわけだ。

しかも、金髪白肌ギャルなんだよ。

今日も、冬だというのに、赤くて肩が出て肌にピッチリした上着を着て、サランラップみたいに薄く白いスカートを穿き、おへそを出している。キラキラ金色に輝くネックレスや、腰のベルトは、オッパイの大きいゴージャスボディを、宝石かなにかみたいに煌めかせている。

肉感的でプロポーション抜群のカラダもすごいけど、顔も最高なんだよ。

お尻まで伸びる金髪は一本一本が細く、芸能人みたいにツヤツヤしてる。欧米人風の彫りの深い顔は気が強うそうに整っていて、そこいらの顔に締まりのないギャルとは別物だった。このダイナマイトボディにこの顔ありって感じなんだよな。

姉ちゃんと同じ年らしいけど、月とすっぽんだよ。

「あーしをジロジロ見ちゃって、どーかした？ 顔になんかついてる？ あ、オッパイがついてるのは元からだよお、あはは」



カラカラ笑った金森さんは、なんと胸を揺らしたではないか。
ユッサユッサ……。

うおおっ、グラビアアイドルというよりもAV女優みたいに、
やたら大きくて形のいい、釣り鐘型オッパイが、粘っこく左右
に揺れてるぞ。

なんて嬉しい光景なんだ。

ほんと、いいチチいや、いいカラダしてるぜ。

もちろん、彼女がオレに特別な気持ちを持ってるわけではない。
なにせ、顔を合わせたのは数度ほど。

それで、恋が芽生えるわけではないだろ？

ゆっちなんで、勝手にニックネームをつけ、親しくしてくれてるものの、姉ちゃんによると誰に対しても同じらしい。

オレがとびきりのハンサムなら話は別だけど、ルックスは平均より下だし。

姉ちゃんのギャル友達は、からかってるんだろう。

だとしても、オッパイを揺らして見せつけてくれるという根性が最高だぜ。

「いつまでも鼻の下を伸ばしてないで、話を聞きなさいユウ」

ツカツカと歩み寄ってきた姉ちゃんは、オレの頭を小突いた。

あ、まずい。

切羽詰まってるぞコレ。ここは大人しく言うことを聞いとくか。

名残惜しいけれど、オレは姉ちゃんを見た。

「なんだよ、姉ちゃん。さっき、頼まれろとか言ってたけど」

「さっき、バイト先から電話があったのよ。シフトに穴があいちやったから、ヘルプに来て欲しいってね。あたしは今から出るわ」

それで外出モードだったのか。

「あんた、どうせ暇でしょ？　あたしの代わりをなさい。ミサ

キにゲームの手ほどきをするのよ。あんた得意でしょ、“ニンカイドースカット”の“大乱闘スカットファイターズ”は」

「ああ、得意だぜ。なにせ、三〇〇時間やったもんな」

「あたしは四〇〇時間だけどね」

「間違えた、五〇〇時間だ」

「やだ、六〇〇時間だったわ」

「嘘吐くなよ、オレとの戦績が九十九勝百敗のくせに」

「あら、九百九十勝千敗のザコ弟がなにか言ってるわあ」

「なんだよ！」

「なによ！」

今にもキスしそうな近距離でにらみ合うオレたち。

「まあまあ、ふたりとも。いい加減、バイトいかなきゃマズいでしょ、ね？」

やんわり割って入ったのは金森さんだった。

格好はケーハクだけど、オレたちが揉めると仲裁してくれるんだよな、この人。

彼女の忠告に、姉ちゃんはハッとした。

「とにかく、ミサキは頼んだわよ。一人前にしてあげなさい。あたしの顔に泥を塗るようなことをしたら、ギタギタにしてやるからね、わかった？」

自分勝手に言い放ち、姉ちゃんは出かけた。

オレの胸はドキドキする。

いや、姉ちゃんの捨て台詞なんかどうでもいいんだ。

姉ちゃんの友達美人JD白ギャルにゲーム指南ってマジ？
他に誰もいない、一つ屋根の下で、この美人とふたりきりで
ゲームできるってか？

オレの目は、自然と金森さんに行く。

すると彼女は、

「よろしくね、ゆっち」

う……うおおお！

彼女が向けてくれた笑顔に、オレは身も心も蕩けてしまう。

友達から借りて、楽しみで仕方なかったエロ本の紙袋が、床
にドサッと落ちたけど、すぐに拾う気にはならなかった。

3

「ふーん、ここがゆっちの部屋かぁ」

ゲームを教えることになった姉ちゃんの友達金森ミサキさんは、リビングは広すぎて落ち着かないから、オレの部屋でやろうと言いだした。

美人の申し出を断るなんてできないから、オレはすぐに通したんだ。

せっかくあったまったりリビングをカラにするのはもったいないけど、自分の部屋で美女とふたりきりで過ごす幸運の前では、

仕方のない犠牲だな。

「片付いてるのね～、掃除も行き届いてるし。ふ～ん」

オレが暖房を付けてる間、金森さんは感心した様子で部屋を見回してる。

自分がされると頭にツノを生やすくせに、ドアなんかないみたいにホイホイ入ってくる姉ちゃんが、部屋が汚いとしつこくうるさいものだから、こまめに掃除や整理整頓しているけれど、よかったなあ。

お陰でこうして、彼女を入れられるんだから。

好意的な様子を見るに、彼女の中でオレの株は上がってるぞ。

「うちの彼氏とは大違いだわァ」

ピキィッ！

オレは凍り付いた。

え……彼氏……？

彼氏……いたの？

硬直するオレに、金森さんは小首を傾げた。

「どしたの？」

「い、いや……金森さん、彼氏いたんだ」

「うん。部屋を散らかし放題のダメ男だけどねー。おまけに、自分が好きだからってゲームを、ほら例の、『ニンテンドースカット』の『大乱闘スカットファイターズ』を、ゲームに興味ないあーしにやらせたり、なのに、下手だって文句言ってさ～」

「はあ」

「だから、見返してやりたくて、ゆっちのお姉ちゃんに指南を頼んだんだあ。彼女、彼氏の横暴に怒ってくれてえ、快く引き受けてくれたんだよねー。実際に教えてもらうのは、ゆっちになったけどさ〜」

彼氏いるのかー。

なんか、ヤル気がしぼんできた……。

いやいや、こんなに美人で気さくなギャルなんだから、彼氏はいて当然だろオレ。

たまたま、お近づきになれる機会をゲットしたタダの男子校生が、そのまま、美ギャルJDと恋人同士になるなんて奇跡は、マンガとかの話なんだよ。

うう……。

たとえ、彼氏がいても、それはそれ、これはこれだ。

ふたりきりでゲーム三昧というのも、なかなか美味しい体験じゃないか。

気持ちを切り替え、貴重なチャンスを楽しもうぜ、オレ。

「んじゃ、彼氏さんを見返すために早速、始めましょうか。『ニンテンドースカット』と『大乱闘スカットファイターズ』はありますか？」

「あるよー……んと……ほら」

彼女はちょっと大きめのラメの赤いハンドバックから、それ

を取り出して見せた。

うお、指も綺麗だな。ほっそりしていて白くて、とても同じ人間の指とは思えない。

しかも、爪はネイルアートこそしてないが、ツルツルピカピカ。日頃から、こまめかつ丁寧にヤスリをかけてる賜だな。おしゃれにかける気持ちはハンパないぞ。彼氏がいる女って、身だしなみに特に気を遣うらしいし。

複雑な気持ちになるが、そんなのを表に出したらヘンに思われる。

オレはおくびにも出さずに、見せられた本体に目を向けた。

話題の“ニンテンドースカット”は、家庭用ゲーム機だ。

本体はスマホの倍位の大きさ。左右に小型コントローラーがついている。

カラーバリエーションは豊富で、彼女が買ったのはピンク色。

J Dが選ぶには少し子供っぽいけれど、おしゃれなギャルのチョイスなら、ギャップで逆に好ましい。

お、星とかでデコレーションしてるな。そういうの好きそうだな、この人。

見るからにカナモリモデルな本体の裏面には、ゲームカートリッジがささってる。

少し見えるシールから、“大乱闘スカットファイターズ”なのは分かった。

このゲームは数十人のキャラクターを使える対戦アクションゲームだ。

それぞれが人気キャラである上に、ゲーム自体が初心者からゲーマーまで楽しめる奥深い作りなことから大人気で、ハードの看板ソフト的な作品だった。

「ハード可愛くデコってますねー。ソフトが既にささってるのは用意がいいです」

「まあね〜」

彼女は子供みたいに白い歯を見せた。

その仕草の可愛いこと。

オレは一瞬見とれてしまった。

でもすぐにハッとして、机の上に置いていた自分のハードとソフトを持ってくる。

「このゲームはテクニックも大事ですけど、使うキャラのレベルと装備も大事です。どういう具合か見せてもらえますか？」

「オッケー。あんま強くないけど、笑わないでよお」
ん。

結構、真剣な顔をしてるぞ。

彼氏か誰かに笑われて、気にしてるのかな。

彼氏だとしたら、ヤな奴だな。

さっきの説明によると、無理に付き合わせてるみたいだし。

マナーの悪い奴って、自分より弱いとみるとボロカスにけな

すもんな。

オレはやらないけどさ。

「笑いませんって。恥ずかしがらずに見せてくださいよ～。ね？
ね？」

「んー、そこまで言うなら、見せてあげようじゃないの」

屈託なくゲームができるようにと下手に出て、拝むジェスチャーをしたら、彼女は破顔一笑し、テキパキゲームを操作した。
電源を入れて、ソフトを起動させ……。

そうしてオレは、ステータス画面を見せてもらった。

「へえ、持ちキャラはピカニャーなんですか」

「うん。だってコイツ、可愛いじゃん」

ピカニャーは、ずんぐりむっくりした黄色いキャラクターだ。
ネコともタヌキともつかない外見に、つぶらな瞳をしてるのは、男から見ても愛らしい。

う～む。

こいつはスピードに優れるけど、攻撃力や防御力といった他のステータスが低めなんだよな。

必殺技は体色から連想される通り、雷を使ったものばかりだ。
尻尾を巻き付ける【締め付け電撃】や、大口を開けて敵を吸い込む【雷口吸引】は、同時に電撃攻撃も行い、相手の動きを封じる。スパークを全身に纏って連続体当たりする【閃光の雷頭突き】なんて、攻撃的な技もあるけど、攻撃力が低いキャラだ

から、威力は他より低めだ。

要するにピカニャーは、手数で勝負するキャラであり、金森さんみたいな初心者向けじゃないんだよ。

でも、ンなこと言ってもしょうがない。

初心者に効率を論じても、ヤル気を削ぐ効果しかないよな。

たとえば、プロアスリートはよく、上手くやれるかどうかにかシビアにならず、楽しくやれるように子供の頃から教わったからここまでこれた、なんて言う。それと同じじゃないかな。

理由はどうあれ、折角、ゲームで遊んでくれる仲間なんだ。

教えて鍛えるにしても、楽しくやれるように意識しないとな。

「可愛いですよ、ピカニャー……ふむふむ、レベルは三十二、装備は、鉄のキバに魔獣の毛皮、俊足の足輪か……野性的なチョイス……いや、コーデですね」

「可愛さとのギャップがあるっしょ。あんまりポイントが溜まらなくて、ろくなのが買えないから悩んだけど、結構、イケてない？」

このゲームでは、使用キャラをカスタマイズできる。

レベルを上げてステータスの底上げができるのはもちろん、アイテムを装備しても強くなる。おまけに、装備によってグラフィックが変わるのだ。ココも、人気の秘密だったりするんだよな。

アイテムは、敵を倒すことなどで溜まるポイントで買う仕組

みだけど、敵を倒したときにドロップすることもある。

彼女のは、ポイントで買えるものばかりだった。

なるほどなるほど。

まずはレベル上げ……レベリングと装備の充実からだな。

基本能力を強くすることで、敵をラクに倒せるようにして、それから効率的な戦い方を教え、身につけさせるという風にすればいいだろう。

「イケてますね、金森さんのピカニャー。かっこ可愛いです。まさしく、カナモリミサキモデルって感じですよ」

「そう思う？ えへへ～」

「このピカニャーでまずは……」

オレは姉ちゃんの友達のこの人の育成を、本格的に始めた。

それは上手くいくのだけれど、まさか、あんなことになるなんて……。

このときオレは、夢にも思わなかったんだよ。

4

「やりい、巨大ボス撃破～☆ あはは、超エモい～」

喜色満面で言ったのは、姉ちゃんの友達で金髪白ギャルの金森さんだ。

ゲームを始めて数時間。

ぶっ続けてレベリングと装備集め、それに攻略指南をした結果、彼女は遂に、巨大ボスを撃破するに至ったんだよ。

「おめでとうー、金森さん」

「ゆっちのお陰だよお。ほんと、サンキュ」

彼女は子供のように笑う。

うおっ、笑顔がマジで天使だぜ。付き合った甲斐がありまくりだぞ。

しかも彼女はゲーム機を側に置くと、なんとオレに抱きついてきた。

「うわわ、金森さんッ」

オレは目を白黒させた。

だって、JDの豊満でプロポーション抜群のカラダが、男子校生のオレの身体に密着してるんだぜ？

ふええ。

生まれて初めてハグされたけど、女のカラダって、すごく気持ちいい。

柔らかくて、絶妙な弾力があって、やたらあったかい。

サランラップみたいに薄い服で、なおかつ露出度の高い服装だから、素肌の感触は結構伝わってくる。

ムニュッ、ムニュッ。

特にいい感じなのは、オッパイだ。

オレの胸板に食い込む双乳の感触は、至福としかいいようが

ない。

コリッとちょっと硬いのは乳首なんだろう。

ソレがオレのと擦れるのは、衣服越しでも最高だった。

うおっ！

まずい。

勃起してきた……。

これは流石にヤバイ。

金森さんには彼氏がいるんだよな。

どう考えても、知られたら、面倒なことになるぞ。

オレはほんとは、抱き返したい衝動に駆られたけど、歯を食いしばって彼女を引きはがした。

「ゆっち？　どうかした？」

「ま、マズイですよ、こーいうのは……金森さん、彼氏いるんですよ？」

小首を傾げた彼女だったが、瞳にみるみる理解の色が広がった。

「やあだ。こんなの浮気のうちにはいないよお。気にしない気にしない」

「そう……ですか……？」

「え、なに？　ひょっとして、ゆっちってば、あーしをひとりのオンナとして意識しちゃってる？」

「ま、まさかっ……姉ちゃんの友達で、ただのゲーム仲間の金

森さんをそんな風には……あはは」

ほんとには一人のオンナとして意識しまくってるけど、言えるわけではない。

オレが適当に誤魔化すと、彼女の頬が膨れた。

「むう。そういう言い方、酷くない？ あーしに魅力がないみたいじゃないのお」

うっ……むくれた顔も可愛いぞ。

まるで子供みたいだ。

そんな態度をとられると、弁解したくなるじゃないか。

でも弁解するわけにはいかないよな。

オレは話題を変えた。

「ところでゲームの話ですが、今の金森さんなら、彼氏さんも満足するはずですよ。かなりの強さになってますから。頑張りましたね」

くっ。

彼氏って口にしちゃったけど、ムカついてきた。

彼氏といえど、彼女を好きに出来る立場。

金森さんの……目の前の最高のオンナのカラダを好きに楽しめる男がいるんだよな。

オレはこんなに我慢してるのに！

「ぜんぶ、ゆっちのお陰だよお。ほんと、ありがとね」

金森さんがニコッと笑う。

うお、可愛すぎる。

オレへの心からの感謝が現れたスマイルじゃないか。

虫の居所が悪くなったオレだけど、悪感情は綺麗になくなった。

美人の笑顔の効果は絶大だぜ。

「強いゆっちとの協力プレイで、経験値が溜まりやすいミッションや、高レベルアイテムがドロップするミッションをこなして、サクサク強くなったんだもん。あーしはステージのすみで防御してただけだったけどさ」

「このゲームは、協力プレイでゲットした経験値やアイテムは、プレイヤーに均等に配分される仕組みですから。いざというときは操作キャラをチェンジできたり、一緒にステージにいただけで経験値は溜まったりしますから、レベルは上がりやすいんです。アイテムは通信で受け渡しできますしね」

「それでいい装備が揃ったんだよねえ。ダイヤのキバに、ダイヤのコート、ダイヤのアンクレット……ダイヤモンドコーデが完成して、ピカニャーは前よりずっと強く、しかもイケてるよお」

「ほんと、かっこ可愛いですよ、金森さんのピカニャー」

「攻撃したり、攻撃を受けたりすると、スマホのマナーモードみたいにブルブルしちゃう、ゲームの振動機能が気持ち悪くて困ってたから、オフにできるって教えてもらったのも助かった

よお」

「やりやすい環境で遊ぶのも、ゲームを楽しむのに大事です。ストレスになることを省いてあげられてなによりです」

「でも……よかったの？」

「なにがです？」

「だって、ゆっち、経験値が余計に溜まるアイテムや、アイテムのドロップ率を上げるアイテムを使いまくったじゃん。こういうのって、高価だったり手が入りにくいものなんだよね。初心者のあーしも、それ位は分かるよ」

金森さんは、高額のアクセサリーをプレゼントされた女の子みたいな顔をしてる。

もらって喜ぶだけじゃなく、相手を気遣えるのか。

派手でケーハクな外見だけど、性根は健気なんだなあ。

ますます可愛く見えてきたぞ。

オレは胸をドキドキさせながら、ぶんぶん首を振った。

「金森さんのゲームキャラを育成するのが、オレの仕事ですから。金森さんに喜んでもらえたり、楽しくゲームできるようになったりしたんだから、本望です」

「うん。レベル上げやアイテム収集だけじゃなく、キャラの戦い方まで親切丁寧に教えてもらえたから、ゲームがチョー楽しいよ。ゆっちとの共闘だったけど、あーしも結構、活躍しながら、でっかいボスすら倒したわけだしね」

彼女はウインクした。

他でもない、このオレに向けてだ。

くそっ、可愛い、可愛い過ぎるっ。

オレの胸はますますドキドキする。

「ゲームなんて、今の彼氏と付き合うまで興味なかったけど、今はすっごく楽しいと思えてる。ぜんぶ、ゆっちのお陰だよ…
…そうだ」

「なんです？」

「ゲームのフレンド登録しよっ。今日だけなんて、もったいない。またゆっちと遊びたいな……ダメ？」

「いいんですか！ 是非っ！ あ、でも……男の名前だと彼氏に見られたときに面倒ですよ。女っぽい名前に変えて……今ロビーに入ってるプレイヤーにフレンド申請っと……」

「お、申請きた。もちろん、承認っ」

「これで、オンラインプレイをしてるとき、お互いにログインしていたら、また一緒に遊べますね」

「えーそれじゃ、効率悪くない？」

「え？」

「ケータイの番号とメアドも交換しようよ。そうすれば、遊びたいときに連絡とれるっしょ」

「いいんですか！ ……でも、彼氏に見られたら……」

「またソレえ？ ゆっちはゲームの遊び仲間です浮気相手じゃな

いんだから、気にしすぎい」

「すいません……」

「でも、ゆっちが気になるなら、登録する名前を変えておくね……なんて名前に……う～ん……そうだ、まんま、ゆっちでいいか。女の子みたいな感じだし。あはは」

「ナイスアイデアです」

オレは早速、ケータイを持ってきて、電話番号もメールアドレスも交換した。

くうっ。

金森さんと、ぐっと親しくなれた気がするぜ。

彼氏がいるんだから、オレと男女の仲になることはない。

それは悔しいけど、気立てのいい美人と親しくなれたというだけで、なんだか心がウキウキする。

「登録名の設定も完了っ、と。それにしても、はあ～、ほんと楽しかったあ」

「オレも楽しかったです。金森さんの育成という仕事を果たせたみたいだから、嬉しいですね」

「仕事を果たせたってことは、ミッションコンプリートだね」

「はい」

「じゃ、報酬をゲットとしないと」

「はい？」

「あーしになにか、お礼させて。それがゆっちの報酬」

「お礼って……」

「なんでもいいよ。あーしにできることならさ」

「そんなのいいですよ。お礼目当てで、ゲームを教えたわけじゃないですから」

「それじゃ、あーしの気が収まらないよ。なんでも言って、ね？」

なんでも、か……。

その言葉が、オレの胸に刺さった。

頭がクラクラする。

なんでもいいのなら……。

頼めば、エッチなことを、させてもらえるのか……？

このカラダを抱かせてもらえるのか……？

オレは童貞だ。

けど……。

望めば……。

この抜群の女体で童貞を捨てられる……？

オレはゴクリとツバを飲んだ。

下半身……股間に、急速に血が流入しているのが、ハッキリ分かる。

ま、まずい。

オレの分身が……チンポがその気になってるぞ。

いや、ダメだ。

相手は彼氏もちだぞ。

しかも、姉ちゃんの友達。

肉体関係を結ぶなんて、危険で背德的すぎる。

「ほ、ほんとに……」

なにもいらないです、と言いたかったのだけど、喉がカラカラに渴いて、上手く声が出せなかった。

でも、金森さんには、十分伝わったらしい。

流石は、彼氏がいるオンナというところか。

彼氏という特定の男とセックスするのを認めているオンナ……だから、ヤッてるオンナ……そんなオンナには、男の気持ちなど、一目でわかるのだ。

「いいよ、ゆっちなら」

「……え」

「あーしとエッチなこと、したいんでしょ？」

「そ……それは……」

「隠してもダメ。顔が真っ赤で、声が掠れて、なにより、チンポが勃起してるじゃないの。今にもズボンを突き破りそうなくらいにね」

オレは慌てて、自分の股間を見る。

うげげ。

なんだ、コレ。

彼女が言うのは、誇張でも何でも無い。

まるで、フランクフルトがズボンの中でそそり立ってるみた

いじゃないか。

こんなに膨らんでるのは、オレも見たことがないぞ。

オレのチンポって、こんなに勃起したのかよ。

友達の弟……しかも、これまでろくにお喋りもしたことのない年下に、こんな浅ましい姿を見せられて、平気なわけないよな。

あーちくしょう、オレはどうなっちまうんだ？

どうなるかは分からないけど、イヤなことにしかないんだろうなあ。

オレが困り果ててると、

スルスル……シュルル……。

かすかな衣擦れの音が聞こえてきた。

なんだ……？

オレは気になって顔を上げる。

するとそこには……。

5

「ほら見て……これが、ゆっちが欲しがってるあーしだよお」

なんと金森さんは、一糸まとわぬ姿になっているじゃないか！

肌にピッチリした服だけじゃない。脱ぎたてホカホカの下着

すら、床に置いてしまっている。

脱いでも彼女のカラダのライン通り、ふっくらしてる下着は上下ともヒョウ柄だった。

パンツはTバックで、ブラは乳輪が隠れる程度のチューブブラ。

こんな下着を着けて……服の下でとはいえ、巨乳と尻タブをはみ出させながら、オレとゲームしていただなんて……！

しかし……ゴクリ。

ほんとプロポーションいいな、この人。

服は紙みたいに薄いから、スタイル抜群の巨乳ちゃんなのはわかってたけど、脱いで迫力が増している。

しかも、肌がすこぶる綺麗だ。

ツルツルスベスベで真っ白い。まるで陶器みたいじゃないか。

男の顔並みに大きい双乳なんて、特にきめ細かい肌だぞ。

大きな土台と釣り合いが取れたサイズの……一般的には大きめの乳輪と丸っこい乳首は、子供の歯茎みたいなピンク色に、年相応の赤みを帯びてる。それが色っぽいなのなの。

おまけに、スンスン……かあっ〜。

すごくいい匂いが漂ってきたぞ。

ミルクみたいだけど、清涼系の香りもほんのりする。体臭と香水だな、これは。

はああ……。

これほどいい匂いをさせながら、こんなに見事な女体を見せられるなんて、最高だぜ。

それに……くうっ！

オレが一番、興味津々な場所だよ。

いいオンナは、オマンコまで、いいもんなんだなあ。

ヘアが丁寧に処理されていて、どこよりも生白いアーモンド型の秘部は、小山のようにこんもりしている。

小陰唇はすっかり収まってるな。はみ出してないぞ。充血し、膨らんできたらどうだかわからないけど。

なににしても、本能を揺すぶられる魅力を醸し出してる。

オレは無意識のうちに、顔を寄せていた。

ほんとに、意識してなかったんだよ。

でも、どんどん、勝手に顔が近づくんだ。

金髪白ギャルのオマンコに、吸い寄せられちまう。

「ウフ、どう、エモいでしょ。男は皆、オンナのココが大好きだけど、ゆっちは特に好きみたいだねえ」

金森さんは悠然とベッドに上がった。

逃げたわけじゃない。

だって、足を広げたんだから。

悪戯っぽい顔をして、いわゆる、エム字開脚のポーズをとったんだ。

これって完全に、見せつけてるよな。

「はあ……はあ……すごい……これがオマンコ……オマンコはすごいぞ……」

オレは止まらなかった。

彼女を追ってベッドに上がり、鼻の頭がくつつきそうなゼロ距離でようやく止まる。

はいつくばって、オマンコと目線を合わせる無様な姿になっていたけど、気にならなかった。今のオレは、オマンコしか見えていないし、それをじっくり鑑賞すること以外に、意識することはなかったんだ。

「ウフフ……さっきまで、親切にゲームを教えてくれてた友達の弟が……年下の男子校生が、あーしのオマンコを、すごい目で見てくれてるう」

金森さんは艶然と微笑んでいる。

浅ましく見られてるのに、嫌がる様子はまったくくない。

むしろ、見せて喜んでるみたいだった。

「その様子じゃ、オマンコを見るのは初めてみたいね……うん、思春期の男の子なんだもん、エロ本で見たことはあるかな。でも、ナマで見るのはきっと初めてだわ。でしょ？」

「う、うん……」

「正直に答えてイイ子ね……じゃあ、もうひとつ答えてくれるかしら……ゆっちって、童貞でしょ？」

「は……はい……」

オレは自白剤でも飲まされたみたいに、素直に答えてしまう。
自分は童貞だとカミングアウトするのは、男として恥ずかしい。

でも、そんな羞恥心はぜんぜん湧かなかった。

もう完全に、オレはオマンコに夢中だったから。

「もじゃもじゃ頭で、身だしなみに気を遣ってる様子はないし、オレにはこれしかないんだあって必死な感じで、あーしのカラダに釘付けになってるから、もしかしたらと思ったけど、やっぱりかあ」

「あ、あの……金森さん」

「なあに？」

「こんな姿、オレに見せてくれていいんですか？ 彼氏がいるんですよね？」

「平気よ。だって、こんなの浮気じゃないもの」

彼女はあっけらかんとしている。

「これはただのお・れ・い。ゲームを楽しませてくれたお・か・え・し・よ。浮気っていうのは、彼氏を忘れて、他の男と本気セックスすることだわ」

なるほど。

よしあしはともかく、金森さんの浮気の定義は、そういうもののなのか。

「折角のチャンスですもの。見てるだけじゃ、もったいないわ。

触っても、いいわよ」

「さ、触って……いいんですか……っ」

オレの頭がジンと痺れた。

浮気じゃないという彼女の言葉には、ウソの響きはない。

それでもオレは、マズインじゃないかと漠然と思うけど、抵抗の気持ちは性欲に負けてしまう。

オレは吸い込まれるみたいに、金森さんの……姉ちゃんの友達のオマンコに……ついさっきまで、ゲームのレクチャーをしていたJDの大事な部分に……彼氏がいるオナナの聖域に、顔を突っ込んだ。

ぶちゅっ。

「へ……………えっ……………ええっ！」

金森さんは大声を上げて驚いた。

その両手がわなわな震えてるのが気配で分かる。

いや、全身が震えてるぞ、コレ。

目を閉じてオマンコにキスしてるけど、なんとなく分かった。

「ちょっと、ゆっち、なにしてるのよっ！」

なにしてると言われても。

実はオレも、自分の行動に驚いてる。

あまりに魅力的な上に、触っていいと許可されたから、身体が勝手に動いてキスしちゃってたんだよ。

オレのファーストキス、姉ちゃんの友達のオマンコにしちま

った。

でも、後悔はない。

だって、メチャメチャいい感触なんだもん。

唇で押すと、プニッと柔らかくて、心地よい反発力で押し返してくる。

美人の大事な部分にキスしてると思うと、メチャメチャ興奮するしな。

……ここで他の男のチンポを受け入れてるという事実には腹が立つから、今は考えない。

でもまてよ……。

本来なら、彼氏しか触れられない場所に触れてるんだ。

そう考えると、横取りした優越感で、いい気分だぞ。

「はぁ……金森さんのオマンコ、触り心地は抜群にイイです…
…すんすん……甘酸っぱいイイ匂いが濃いなあ。ちょっとしょっぱいのは、汗とかの味かな」

他のヤツのだったら気色が悪いと思うだろうけど、美人のだと思うとぜんぜんイヤじゃない。むしろ、美味しいくらいだ。脳内麻薬がドバドバ出てるんだろうな。

「ッ〜〜〜！ ダメだよゆっち、そんなとこ、汚いってえ……あふう」

……ん？

おや？

いきなりオマンコに、彼氏以外の男がキスしたんだ。ぶん殴られても仕方ないだろう。

なのに、恥ずかしそうな声で、制止めいたことを言うてくるだけだなんて。

もしかして、嫌がってない？

オマンコにキスされても、悪くないと感じてる？

それじゃ、続けてみるかな。

人生百年時代なんて言われてるけど、こんなチャンス、二度とないかも知れないし。

「ふう……金森さん」

「あ……離れてくれたんだ……」

お、顔をちょっと離して彼女の顔を見たら、安心したような、残念そうな感じじゃないか。やっぱり、満更でもないみたいだな。

「金森さん」

「いきなりオマンコにキスされたから、びっくりしたよお。勢いでやっちゃったんでしょ。オマンコにキスだなんて、彼氏もしないのにさあ」

オレの胸が高鳴った。

彼氏はオマンコにキスしないのか。

こんなにいいオマンコに、キスしないなんて、どういう男だよ。

オレは顔を離したけど、キスをやめたわけじゃないんだ。
そうか。

なら、オレが彼氏の分も、たっぷりキスしてやらないとな。
キスというか、舐め回してみる気だけどさ。

「金森さん、オマンコ舐めさせてもらいますね」

「……へ？」

触っていいと言われてるんだ。

理解の追いつかない彼女に構わず、オレは舌を長く伸ばし、
さっきまで唇を重ねていた大陰唇に触れた。

ぴと……ぺろっ……ぺろっ……。

触れたらすぐに、ソフトクリームでも舐めるみたいに、繰り返して舐め上げる。

舌は敏感な器官だから、ギャルJDのオマンコの肉の具合がよく伝わる。

舌で触れても、イイ感触してるぜ。

プニプニしていて、舐めてるだけで癒やされる気分だぞ。

さてと。

運良く彼女のオマンコキス……クンニの初めてを奪えたんだもんな。

記念にオレのツバを全体に塗りたくってやる。

もちろん、大陰唇の隅々まで、その感触を楽しむんだ。

オレは、お肉がちょっと凹む程度の強さで、ベロベロ舐め上

げる。

ソフトクリームを舐めるときというよりも、ネコがミルクをピチャピチャするときの素早さで、エロく膨らむアーモンド型を舐め回した。

オレのちょっと黒ずんで肉の分厚い男子校生の舌が、JDの生白くふっくらした大陰唇を何度も這う……隈なくしつこく這い回る。

「ええっ……そんな……ああ……うそ……友達の弟に、オマンコ舐められちゃってるう」

金森さんは、金切り声を上げた。

戸惑ってる風だが、ときどき、あえぎ声が混ざるのが色っぽい。

普段の低めの声が甘く高くなってるのも、耳に心地よかった。すげえ。

JDも、こんな声出すんだ。

一緒にゲームしてたときは、こんな声、出さなかったのに。

こんなエロ声を、オレはまんまと、引き出せてるんだなあ。童貞なのにさ。

「うう……はああ……やあ……オマンコが熱くなってきたわ……んん」

オレに舐め上げられると、彼女の秘唇が気持ちよさそうに震える。

舐めれば舐めるほど、その間隔は狭くなった。

やがて常に、ヒクヒクと可愛く、快感に打ち震えるようになったんだ。

「あああ……んあ……ダメ……オマンコが開くう……はあああ」
一〇分くらい、ペロペロしてただろうか。

それ位の時間、オレを引き剥がすでもなく、彼女は無抵抗にクンニを受けていたわけだが、とにかく、陰唇がだいぶ充血していた。

オレのツバで飴を塗った風に照り光るJDマンコが、目の前で、まるで花が咲くみたいに開いていく。

一回り膨らんだ大陰唇だけじゃない。左右対称でアワビを思い出させる形の小陰唇と膣前庭が露出して、張り詰めている。

うへえ。

内性器は、ものすごくキレイな鮮紅色だぞ。

甘酸っぱい匂いがますます濃くて、顔を近づけてるだけでクラクラする。

お、下の方のちょっと窪んだところから、汁の筋が伸びてるぞ。

ココが膣口だな。

……って、おい！

コレって、オレのクンニで金森さんが感じまくってるってことだよなっ。

オンナは性的に興奮すると濡れるのを考えると、間違いない。
くうっ。

嬉しいぜ。

童貞のオレが、初クンニでこんな美女を気持ちよくさせているんだ。

彼氏はクンニをしないそうだから、彼氏を出し抜いたわけでもある。

もっと言えば、本当の意味でクンニ処女を横取りしたとも言えるんだ。

すごく気分がいいぞ。

日常では味わえないドス黒い快楽で、心臓がドキンドキン拍動してる。

処女膜をチンポで食い散らかしたのに匹敵する、男冥利じゃないのかコレ。

「オレのクンニで感じてるんですね、金森さん。嬉しいです、ぺろぺろっ」

「それは、んンン、あああ、はあ……あああ……あふう……」
む。

彼女のがり声が、変わったぞ。

高くなってたのが、ちょっと低くなってる。

それに、なんだか不満そうな雰囲気もあるじゃないか。

「金森さん、どうしたんです？ オレのクンニ、下手ですか？」

まあ、エロ本とかで知識はあったけど、実践したのは生まれて初めて。

ぶっつけ本番のクンニが、上手いわけはないよな。

処女でもないJDには、物足りないかもしれない。

クンニ処女は、どうやらオレが奪えたみたいだけどさ。

までよ……。

「ううん……ゆっちのクンニ、すごく上手よ……はああ……気持ちよかったわ」

うお。

褒めてくれてるけど、声が本気じゃない。

お世辞って感じだ。

やっぱり、不満なんだな。

とすると……。

「もっと気持ちよくしてあげますね」

「……え」

オレはオマンコに左手を軽く添えた。

そうして、指を結構、広めに開いて……。

くばあ。

開いていた陰唇を、力尽くで左右にこじ開け、膣前庭と小陰唇をすっかり露出させた。

力尽くでこじ開けると言っても、そこは女体に対してのこと。

壊れ物を扱うつもりで、やさしく開いてやったんだ。

美人のオマンコであり、これから楽しませる急所なんだからな。

「ええっ、そんなに開いたら……ああっ、あーしの大事な部分の内側が、ぜんぶ見られちゃってるっ……彼氏もそこまでしっかり、見たことがないのにつ」

お。

オレはまた、初めてを奪ったみたいだぞ。

内性器の全貌を視姦されるという、初めてだ。

彼氏を出し抜き、美人の恥ずかしいところを見られたなんて、イイ気分だ。

オレは上機嫌で、またも舌を長く伸ばした。

今度のターゲットは、膣前庭の上の方。

皮を被ったおマメみたいな器官。

そう、クリトリスだ。

彼女のは、結構、大きい。

性的に充血してるとはいえ、大豆くらいはあるな。

それに舌先で、ちゃんと触れる。

「んぐうっ……！ ええっ、く、クリちゃんまで、舐めてくれるのお……！」

悲鳴じみた声を上げて喉をそらし、長く艶やかな金髪をふわっとなびかせた彼女。

ヤル気出るなあ。

彼女は、セックスの味を占めてるオナだから、性的な刺激に貪欲なんだよ。

だから、大陰唇を舐められる位じゃ、すぐに満足できなくなる。

それ故の、不満そうな態度だったんだ。

なら、もっと濃密な刺激を与えればいい。

たとえば、オナのチンポとも呼ばれるほど、敏感で気持ちのいい器官である、クリトリスとかな。

そう考えたら、ビンゴ。

彼女は露骨に悦んでる。

さっきの言葉には、羞恥と、それ以上に淫らな期待がこもってたもんな。

オレは確信を込めて、舌を使った。

なにしろ、特に敏感な場所だ。

大陰唇にしていたときよりも力を抜き、舌を舐め上げる速度も緩めた。舌先でくすぐる案配で、ノロノロねっとり、舐め上げたんだよ。

舌にしつこく張り付かせながら、根元からソフトに揺すぶりまくる。

「う、うそおっ、ンああ、クリちゃんをこんなに上手に舐めてくれるのお、はううン」

うへへ。

悦んでる悦んでる。

すごいエロ声出してるぜ。喉が嗄れるまで出して欲しい声だぞ。

でも、声もいいけど、クリトリスの舌触りもすごくいいな。

男のチンポから排泄機能をなくしたようなものだそうだけど、確かに、勃起チンポのミニチュアという感じだ。

バッキバキに硬くしこっててさ。

美人のが、彼氏でもない男に舐められて、こんなにしてるといのが実にいい。

よし。

ここまできたら、最後まで面倒みないとな。

イカせるってことさ。

クンニもしてやらない彼氏の代わりに、このオレが満足させてやるんだ。

そのときは、どうやらそう遠くないらしい。

何故かと言うと……。

「ンああっ、はあっ、はあっ、クリをそんなに優しく舐められたら……ひああっ！」

彼女の声が、切羽詰まってる。

オレの舌に常時触れてるクリトリスも、もう限界とばかりに、ひっきりなしにビクついてる。

膣口からは、トロっとした愛液が溢れるばかり。



ンああっ

カレすら
舐めてくれない
ところを、あッ

くちゅ
くちゅ
くちゅ
くちゅ

しかも、匂いも味も濃くなってる。

これは、どう考えてもイク寸前だな。

「ダメよ、ンン、やめてえ、はうう、年下の童貞に、あはあ、友達の弟の男子校生に、オマンコを舐められたその日にイカされるなんて、JDの沽券に関わるじゃないのおっ」

お、年上のプライドを発揮してるぞ。

性に対してフランクで、自分から裸を見せておきながら結構、強情だな。

それはそうかもなあ。

オレにしても、年下の異性にいいようにイカされたら、年上の男として悔しいだろうし。

でも、許さない。

オレが下手すぎて、ちっとも気持ちよくないというのならまだしも、上手い……というより、自身のツボにはまり過ぎてるという理由で、イクのを我慢されるのは面白くない。

気持ちは分かるけど、耐えようとするなんて、無駄な努力さ。

だって、このオマンコのコトは、だんだん分かってきてるんだから。

ゲームを攻略するのと同じだよ。

隙を……弱点を突けばいい。

オマンコなんて弱点だらけ。

男のミッションコンプリート……イカせるなんて、わけはな

いんだ。

オレは秘唇を広げている指に力を込めた。

といっても、肌を半分位へこませる程度。これからやることが上手くいくように……やっているとときにスッポ抜けないようにするための力だけを込めたんだ。

そして、おもむろに、指を上下に揺すった。

ブルブルブルブルブルブル！

「ひあああああッ！ ああっ、はあああっ、そ、そんなことまでするだなんてえッ」

オレは指を素早く上下させ、陰唇にバイブ刺激を送り込む。

大陰唇だけじゃない。小陰唇と膣口、その奥の膣まで届くよう乱暴に、けれど、痛くしないよう、彼女の反応を見ながら、振動刺激を与え続ける。

「ンひいい、ダメダメダメえ、ほんとにイッちゃうう、もう許してえっ」

ぶしゃあっ！　ぶしゃあっ！

効果観面だ。

膣口から、まるでオシッコしてるみたいに、愛液が飛び出す。

彼女の下半身……いや、全身が、ガクガク揺れている。

エム字開脚のままで、ぶるぶる震えてるんだ。

もちろん、陰唇……大陰唇も小陰唇も、一回り肥厚し、なんとも言えない色気を醸し出している。

「ああ、イク、クリちゃんを舐められて、オマンコを揺すぶられながらイっちゃうう！」

彼女はオレは追い込み続けるオレに、イイ声で泣き言を叫んでくれる。

「ダメなのにい、格好悪いのにい、イクの我慢できないい、友達の弟に、年下の童貞男子校生に、女子大生なのにイカされちゃううっ」

断末魔の叫びとも、女の悦びを享受しまくってるという申告ともつかない絶叫の直後、彼女は……姉ちゃんの友達の金髪白ギャルは、絶頂した。

ガクガクガクガクガクガクッ！

ほっそりした指先をオレのもじゃもじゃ頭の髪に絡ませてしがみつки、反対の手は、身体のバランスをとりながらシーツにつき、握りしめて、しわくちゃにしながら、エム字開脚のまま、で、絶頂痙攣する。

すげえっ！

オレのベッドで……オレが寝起きしてるところで、ルックス抜群の巨乳女子大生が、気持ちよさそうな顔して、ガクガク震えてる。

全身で痙攣してる。

なんて、背徳的で達成感を刺激する光景なんだろう。

まるで、彼女を自分のモノにしたとすら思えてくるぞ。

男の下卑た優越感がくすぐられるぜ。

男に生まれてよかったって、本気で思う。普段は考えもしないのに。

あ〜、気持ちいい。

射精するのとは、また違った快感だなあ。

ビュッ……ビュッ……。

女の絶頂は、男の何倍も長い。

オレは衝動のままに、イッてる最中の彼女を責め続けたんだけど、その間、膣口からは液体の水しぶきが迸った。

うっ、顔にかかるぞ。

これもイカせた証だと思えば、男冥利だ。

他人の体液を浴びせられるなんて、普通は気分のいいものじゃないが、今は別だ。

けど、これって愛液なのかな。

なんか、今まで流れていたのよりも、サラっとしてる。

ひょっとして、潮じゃないのかコレ。

潮の成分は尿とだいたい同じだと言われてる。

つまり、オシッコを浴びてるわけだ。

ぐう。

そう考えると、なんかイヤな気分になってきたぞ。

ダメだダメだ。

いいかオレ、これは潮だ。オシッコじゃない。オシッコじゃ

ないんだ。

オンナのオシッコは聖水と呼ばれるけど、今のオレは、そこまでレベルは高くない。

だから、これは潮なんだ。オレは潮噴きさせたんだ。彼氏を差し置いて。この美人に。

うむ。

ちょっと下がった気分が、盛り返してきたぞ。

お。

彼女がだいぶ落ち着いてる。

オーガズムが一段落したらしい。

オレは、ゆっくり顔を離した。

舌先とクリトリスが白く太い唾液の糸で繋がっていたが、下に凸の半円を描きつつ、やがて切れる。

周囲には、達したことでますます濃くなったメスの匂いが立ちこめている。

このオレの部屋が、オンナの芳醇な香りで満たされる日が来るなんてなあ。

その前は、美人のエロいあえぎ声が響いてたわけだし。

不思議な感じだ。

オレは、今までに体験したことのない気持ちに包まれていた。

性行為……セックスって、すごいな。

人生観が変わりそうだぞ。

しかし、目くるめく時間は、まだ始まったばかりだったんだ。
まさか、あんな形で、先に進めるだなんて。
このときのオレは、思いもしなかったんだよ。

6

「むう……ムカツク」

童貞であるオレのクンニでイった、姉ちゃんの金髪白ギャル友達こと、金森さんは、息を整えるなりボソリと言った。

げっ。

なんか、不機嫌だぞ。

贅肉なんかついたことがなさそうな、すっきりしたほっぺがリスみたいに膨らんでる。

けど……うへへ……むくれてる顔も可愛いぜ。

オレが思わずニヤけたとき、彼女の不満が炸裂した。

「なに笑ってるのよお、ゆっちい」

「すみません。むくれてる金森さんが可愛くて」

「っ……な、なに言ってるのよ、もう」

あ、なんか照れてる。

顔が赤くなったぞ。

「あーしは、ムカついてるんだからー」

「なにが不満なんです？ ついさっき、あんなに気持ちよさそ

うにイッたじゃないですか。オレのクンニで」

「それが不満なのお」

「へ？」

「あーしは処女でもないのに、童貞の、しかも年下の男子校生なんかに、いいようにイカされまくってさあ。これじゃ、沽券にかかわるよお」

そういうことか。

言われてみれば、さっきイキまくるとき、そんなことを言っ
て抵抗したっけ。

結局、無駄な意地を張っただけだったけどさ。

しかし……ふむ……。

やりすぎたか……。

機嫌が悪くなったということは、ここでゲームオーバーだな。
オレのチンポは、ズボンの中ではち切れんばかりに勃起して
る。

正直、すげえ苦しい。

手コキしてもらうか、彼女で見抜きして、気分よく締められ
たらよかったんだけど、続行は無理そうだ。

ちえ。

選択を誤ったなあ。

まあ、彼氏もちギャルのクンニ処女を奪えたり、そのままイ
カせたりしたから、そんなに悪いことじゃない。

むくれても可愛い顔なんてレアなものも、見られたしな。

後は、なんとかなだめて別れるだけだ。

ケンカ別れしたら気まずいもんな。

ゲームでフレンド登録したり、電話番号とメアドを交換したりした仲なのにな。

そんな風に、性行為の終了に納得するオレへ、しかし彼女は、「こうなったら、リベンジしてやるんだからっ」
「ええっ！ リベンジって……あわわ……オレに復讐するっていうんですかっ」

やばい。

そこまで追い込んでしまったのか？

こりゃ、なだめるなんて、できるのか怪しいぞ。

「復讐って、なに言ってるの？ そんな物騒なこと、どうしてあーしがするのよお」

「違うんですか？」

「リベンジって言っても、仕返しとか、捲土重来的な意味なんだからあ」

「流石、大学生。捲土重来なんて頭のよさそうな言葉まで口にするとは。けど、なんにしても、復讐の範疇じゃ……」

「だから、今度はあーしが、ゆっちをイカせまくるって言ってるの！ イカされまくった、このオマンコでえっ」

なんと彼女は、ベッドに仰向けに寝そべるなり、大きく足を

開いた。

うおおおっ！

オレが舐めまくったオマンコが、全開じゃないかつ。

しかも、こんなポーズを男の目の前でするなんて。

意味は考えなくてもわかる。

直前に彼女が、挑戦的に言い放った言葉を踏まえれば確定的だ。

「ま、ま、マジでいいんですか……お、オレ……金森さんのオマンコに……チンポ突っ込んでホントにいいの？」

「そう言ってるじゃん」

「こ、コンドームなんて、ないんですよ？ ナマハメになっちゃいますよ？」

「外出ししてくれればいいわ。安全日だから、万が一、中出しされてもギリギリセーフだけどお……流石に、浮気じゃなくても彼氏以外に中出しされたくないなあ」

「そうそう、彼氏いるんですよ？」

「セックスしたいって思ってるんじゃないく、汚名返上のためにパコるんだから、浮気じゃないって言ってるじゃないのお」

「それは聞いてますけど……ほんとにほんとに、ハメていいんですか？ オレの童貞を奪ってくれるんですか？」

「あーしがいいって言ってるんだから、ごちゃごちゃ言わずにハメなさいよね！ 男の子でしょ！」

本気だ……。

馬鹿にする彼氏を見返すために、不得手なゲームの特訓をする人だし、金森さんには負けず嫌いなところがある。それが妙な具合に現れたもんだなあ。

ナマハメしちゃうのには、漠然とした抵抗感がある。

相手は彼氏がいる人で、姉ちゃんの友達なんだ。

しかも、オレとはろくに喋ったことはなかった。

恋人なんかじゃない。

それでも、こんな美人にハメられる……こんな極上ボディで童貞を捨てられるチャンスが訪れるなんてなあ……。

人生わからないもんだ。

オレはおもむろに服を脱ぎ、素早く素っ裸になった。

折角の初体験。

全裸になり、ナマでオンナを感じなきゃもったいない。

人生百年時代なんて言われてるけど、もう二度と、こんな美人とセックスできないかも知れないもんな。そうだよ、抵抗感なんてクソ食らえだ！

「フン、ようやくその気になったようね」

金森さんは、鼻を鳴らした。

ちょっと剣幕が収まった気がする。

「ふうん……結構、いいカラダしてるんだあ」

彼女はオレの身体を目で舐め回す。

うっ。

美人にマッパを見られるのは、そんなに悪くないな。

なんだか妙に興奮する。

オレにこんな趣味があったなんて、知らなかった。

きっと、金森さんだからだろうけど。

「スポーツでもやってるの？ 部活は？」

「集団行動は好きじゃないので、部活はしてないです。自分でランニングとか筋トレしてるくらいで」

「へえ。野良部なのに体育会系なんだ。身体を動かすのが好きなのね」

「そんな高尚なものじゃないですよ」

「ん？」

「逞しい男はモテるって聞きますし、いつ誰とセックスできるかわかりませんから、それに備えて身体を鍛えてるんですよ。その割りには、顔や髪の手入れはダメダメで、コンドームも常備してませんけどね。そこまでするのには、露骨かなって……」

「アハハ、ウケるう〜。ゆっちって、童貞の見本みたいな男の子だねえ。準備がハンパなのも含めてさあ」

「あはは、誰にも言ったことがないのに、つい、口を滑らしてしまいましたけど、格好悪いですよねえ」

「ううん、すごく可愛い。超エモいよ、アハハハ」

金森さんは子供みたいに笑ってる。

ふう。

どうやら機嫌は、完全に直ったらしい。

うん。

怒ってる彼女も可愛いけど、笑ってる方が可愛いな。

抱くにしても、笑顔の女の方が、抱き心地がよさそうに思える。

さて。

打ち解けたところで。

オレはゆっくり彼女との距離を縮め、その大きく開いた足の間に陣取った。

裸のオレのチンポが、彼女のオマンコของすぐ側で、斜めに反り返る。

「へ……………ええっ！」

と、金森さんが素っ頓狂な声を上げた。

なんだなんだ？

「よく見るとゆっちのチンポ……超エモいじゃん！」

彼女はオレのチンポをまじまじと見ながら、両手で口元を押さええている。

え、褒められてるの？

オレいま、チンポを褒められてる？

「フランクフルトと同じ位長くて、でも倍はぶっとくて……バッキバキに硬くそそり立ってて……おまけに、ちょっと黒ずん

でるけど、日焼けした肌って位で、まだまだ初々しい肌色なのがギャップ可愛い！　ほんとにエモい！」

よく分からないけど、だいぶ気にいってもらえたみたいだ。

嫌われるよりもいいけれど、なんだかまだピンとこない。

考えてみれば、他人とチンポを比べたことはないから、他人と比較してオレのはどうだってのはぜんぜんわからないもんな。

「オレのチンポ、そんなにいいんですか？」

「うん、立派立派。サイズと勃起する勢いだけなら、あーしの彼氏に匹敵……ううん、もしかしたら、上かも」

「そんなに！」

彼女がお世辞を言ってるようには見えない。

だんだん実感が湧いてきたぞ。

そうか。

オレのチンポは、美ギャルJDを彼女にする男のに、勝るとも劣らないのか。

オレの気持ちは大きくなった。

彼女の好評を根拠に、自信を持って、膣口のくぼみにチンポの先を押しつけた。

ぐちゅうっ。

「アハハ、超エモいチンポきたあ」

クンニでイカせてから少し時間が経ってるけど、チンポをあ

てがった彼女のオマンコは、まだまだ十分濡れていた。

このまま押し込んでも問題ないだろう。

チンポは膣内をスムーズに進むに違いない。

「いきますよ、金森さん」

「いつでもいいよお」

この期に及んでも、彼女の態度は変わらない。

くうっ。

こんな美人の、チンポを受け入れてあげるって態度は、すごく嬉しいぜ。

恋人同士になったわけじゃないけど、彼氏がいる美人JDと合意の上で、本来なら彼氏しかチンポを入れられない肉壺を使えると思うと、とんでもなく興奮する。

しかも相手は、姉ちゃんの友達。本当なら、肉体関係をもつ相手じゃない。なのに、オレは肉体関係をもっちゃってる。

クンニしたときも思ったけど、人生わからないもんだなあ。

オレは心臓をバクンバクン言わせながら、股間に体重を乗せた。

「じゃあ……」

やや前のめりになり、正常位の体位で、仰向けの彼女の大事な肉壺へ、ゆっくりチンポを埋めていく。

ぐちゅ……ぐちゅちゅ……ぬぷぷぷ……。

なんともいやらしい粘っこい水音が、オレの部屋に響く。

うおおっ……！

これがオナナのナカ……オマンコの内側なのかつ。

火が点いたみたいに熱いぞ。

おまけに全面的にヌルヌルだ。

しかも、粘膜……媚肉がとんでもなく柔らかい。プリップリじゃないかつ。

そんな肉が、エラの張ったカ리를備える龟头どころか、その裏側までくっついて……竿にも押し寄せ、密着してくるう……。

くああっ……！

チンポが一気に燃え上がるう。

感度が急速に増し、チンポを包み込まれてるだけで、先走り汁が出そうになってるっ。

チンポの奥から、グツグツと煮えたぎる精液が上ってくる気配もあるぞ。

マジかよっ。

オマンコにナマ挿入するって、こんなに気持ちいいものだったのか？

入れたばかりなのに、まるでオナニーの終盤の快楽じゃないかつ。

「あはン……ゆっちの超エモいチンポお……略してエモチンがあ……あーしのオマンコを自分の形に変えちゃってるう……ンン、ナカで暴れてえ、精液ぶちまけたがってるう」

金森さんも気持ちいいんだろう。

信じられないけど、クンニのときよりもさらに甘ったるい声を出してる。

おお、全身が小刻みに震えてるぞ。

クンニしてる時も、こんな感じだったんだろうけど、オレはオマンコに顔を突っ込んでたから、直接見なかった。

うんうん。

チンポを入れたオンナが、全身で気持ちイイって叫んでくれてるのは、イイもんだな。

うへへ。

オッパイが可愛く揺れてるぜ。

おおっ。

赤みを帯びたピンク色の乳首が、ヒクヒク震えながら膨れあがってる。

オレのチンポに勝るとも劣らない勃起ぶりを披露してるじゃないか。

乳首も可愛いなあ。

こういうのも、本来は彼氏しか見られないんだよな。

でもオレは、見ちまってるんだ。

うっ……。

やばい。

正常位で合体するのが、色々な意味で気持ちよすぎて、射精

しそうだ。

チンポがビクンビクン跳ね回ってる。

と、止められないっ。

「あぁン、ゆっち、入れたばかりなのに、もう出しちゃうの？」

「うっ」

彼女の声には、咎めたり失望したりしてる響きはない。

むしろ、優しく包み込む感じだった。

でも、クンニでイカされたのを覚えてるんだろう。

悪戯っぽい声音を孕んでる。

いいように翻弄されたカタキを討てそうかわって、感じなんだ。

「童貞なんだから仕方ないわ……ンっ……いつでも出していいわよ……はぁ、でも、ナカはダメだからね……？」

「金森さん……ううっ……」

「これは浮気セックスじゃないけど、子宮は彼氏のものだから、ンン、浮気セックスじゃないセックスでも、そこだけは譲れないわ、はぁン、中出しする快楽を教えてあげられないのは申し訳ないけれど、それは未来の彼女に教えてもらってね、あふう」

「は、はい……」

まぁ、当然か……。

くそお……中出しできないのかぁ。

でも、相手の意志を無視するわけにはいかないよな。

無理矢理なんて、暴力を振るうのと同じなもの。

裸を見せたり、オマンコを舐めさせたり、筆下ろしまでさせてくれたりする彼女に、そんな真似はしたくない。

強引に迫って、ここでお終いなんてこともゾツとしない。

多分、一回射精したくらいでは、オレのチンポは萎えないだろう。

オナニーは毎晩のようにしてる。

オレはいつも、二、三発出してやるんだよ。

だから、連射できると思うけど、ナマハメするのは初めてだもんなあ。

もしかしたら、一発で精根尽き果てるかもしれない。

なら、その一発に至るまでを長引かせなくちゃな。

こんなオマンコにナマハメするチャンスなんて、もうないかも知れない。

じっくり味わっておかないと。

オナニーのときに思い出してオカズにしたいしさ。

できるだけ長持ちさせて、身体に快楽を刻みつけてやる。

「射精するときは必ず、外出ししますね……んっ……」

オレは約束し、奥までチンポを埋めた。

射精しそうだったから、歯を食いしばり、あんまりチンポに意識を集中させないように気持ちを散らす。

それじゃ本末転倒な気がしたけど、それでもチンポは十分気

持ちいい。

ぶじゅう。

先っぽがコリコリした部分に当たり、股間が大陰唇と密着した。

「んっ、くううっ、あはは、やっぱり、届いちゃったかあ、ンン」

「ここってまさか……」

「うん、ゆっちのチンポ、あーしの子宮にキスしちゃってるよお」

「やっぱり……」

「ンン、くうう、彼氏も調子いいときしか届かないところを、あっさり奪っちゃうなんて、エモチンといい、童貞離れしてるよゆっちはあ……あ、童貞卒業おめ～」

金森さんは、汗ばんだ顔でニッコリ笑う。

うわわ、すさまじく可愛いつ。

チンポを奥まで埋め込んだ美人にこんな顔されるなんて、マジで辛抱溜まらないぞ。

なんとか耐えていたチンポが……爆発しそうッ。

しかし、気が強い人だけど、根はやっぱり優しいんだな。

それに、セックス好きのスケベだ。

オレへの意趣返し of 気持ちより、オマンコをぶっといチンポで埋められる快感の方が勝ってるんだもん。

ああ、色っぽい。

エロい。

彼女の方こそ、性的な意味で超エモい。

しかも、彼氏すらあまり届かない場所を奪ったんだから、超キモチイイ。

これが寝取る快楽の一種なのかな。

心は寝取れてないけどさ。

それにしても……くうう……金森さんのオマンコ。

奥に入れたままでいたら慣れてきて、どういうカタチしてるのか、だんだん分かってきたぞ。

横皺が一杯なんだ。

内側全部が、小さいヒダで溢れてる。

溝は割と深め。段差がハッキリしていて、細かくでこぼこしてるんだよ。

それがチンポを丸ごと包んでるんだ。

マジ快感。

なんだよ、コレ。

自分の手で握ったときなんかとは、ぜんぜん違う。

オマンコにチンポを突っ込むのが、こんなにいいものだったなんて。

う……ヤバイ……。

時間が経てば経つほど、馴染む。

性感が大きくなる。

入れた直後も最高にキモチいいって思ったけど、どんどん記録が塗り替えられてる。

マズイ……。

精液が、もうそこまで迫ってる。

じわじわ上ってきていて、止まらない。

このままじゃ、出ちゃうっ。

オレは追い立てられる心地で、腰を使い出した。

ぬぷっ……ぬぷぷ……ぬぷぷぷぷ……。

卑猥な水音が、普段オレが寝起きしている部屋に木霊する。

初めてで慣れてないからゆっくり抜き差ししてるけど、これがまたよかった。

細かい凸凹だらけの熱い粘膜と、チンポを擦らせるのが、すこぶるキモチいい。

チンポは瞬く間に、熱い性感の塊になり、しきりに跳ね回ってる。

「ンああ、はああ、ゆっちが腰を振り始めたよおっ、あああ、ナカが擦れてるう」

金森さんが可愛くあえぐ。

彼女もかなり、キモチいいみたいだ。

天井を仰ぐ目はトロンとしてる。

股間を中心に、汗ばんだ女体は小さい痙攣を繰り返す。

ああっ、カレのより、
ん、太いわ、あはあッ

奥まで、ンっ、
ンっ、届いてるう

ぽんぽんぽんぽん
ぽんぽんぽんぽん



もちろん、快感の痙攣だ。

ううっ、その肢体……たまんねえ！

オレは彼女にしがみつく風に、片腕でそのムチムチした長い足を抱えたり、反対の手でガッシリ掴んだりした。

我ながら独占欲剥き出しの仕草だぜ。

彼女には恋人がいるけど、今、抱いてるのはこのオレなんだ。

浮気じゃないと言い張る心はともかく、カラダはオレのもの。

そんな、自分でも驚く凶暴な性欲が噴きだして駆り立てる。

慣れてきたオレは、ストロークを長くしてピストンした。

敏感な亀頭だけじゃなく、感度の鈍い竿でも隈なく、生まれて初めてナマハメしたオマンコを味わいたかったからだ。

ずにゅうう……ぬじゅううっ……ぬぷぷぷぷぷ……。

うおおおおっ！

なんだ、コレっ。

チンポ全体が、オマンコに扱かれてるッ。

今は自分の形に広げてるけど、本来は狭い肉穴は、優しく締め付けながら、奥へと扱いてくるんだ。

細かい凸凹でチンポが擦れるのも、とんでもなくキモチいい。

自分の手でするときとは月とスッポン。比べものにならない。

うはあっ。

敏感なカリも、その裏も、ぜんぶ膣ヒダと擦れるの最高！

オレは夢中で腰を振った。

性欲のままにピッチを上げると、性感が一段と濃密になる。

うああ、チンポ痺れるう。

下半身が蕩けて、感覚がなくなってくぞッ。

でも、チンポとオマンコ存在感だけは鮮明だった。

「はあっ、はあっ、金森さんのオマンコ気持ちいいですっ、こんなオマンコとナマハメできて、ほんとラッキーッ！」

「ンああ、あーしもだよ、ゆっち」

彼女はうわごとのように答えてきた。

その顔はすっかり赤らんでる。

細かい汗の粒を浮かせてるのが、とんでもなく色っぽい。

声にしたって、高く可愛くなってるし。

これだけでも余裕で見抜きできるぞ。

「彼氏よりもおっきなゆっちのチンポでズコズコされてるの、すごくエモいのっ」

「オレのチンポでパコられるの、そんなに気持ちいいんですかっ」

「こんなときにウソついてどうするのよ、はああ、エモい、エモすぎるよおっ」

「彼氏のチンポにハメられるより、いいんですか？」

「えっ……そんなこと、聞かないでよお、はああ、はううん」

うわ、言葉を濁したぞ。

いつも明け透けな金森さんが、今、言葉を濁した。

その意味は、考えるまでもない。

オレの方がいいんだよ。

他に考えられないよな。

マジかつ。

オレ、彼氏のチンポに勝っちゃってる。

ついさっきまで、童貞だったこのオレが。

「ふあああっ、ゆっちのチンポお、また大きくなってるう」

「彼氏よりいいチンポで、奥を突いてあげます」

一番奥に、オレというオスとセックスした記憶を刻みつける心地で、突き回す。

長いストロークで、かつ、素早く、何度も何度も突きまくる。

はああ……いい……。

ほとんど誰も触れられない大事な部分を、子宮を、チンポで何度も突くこの快感。

開発されたら、クリトリスとかに匹敵する性感帯になるそうだけど、彼氏があんまり届かないというのなら、まだまだウブだろう。その意味では、セカンド処女……一定期間、セックスしなかったオンナと同じわけだ。

だから、突き込むときは力を抜き、できるだけ優しく突いてる。

それでもやっぱり、根元から先っぽまで、胎内に包まれるのは気持ちいい。

一番奥まで征服するのは、男の下卑た優越感をこの上なく刺激する。

「あああ、うそっ、あーしまった、いいように遊ばれてるう、ンン」

完全に受け身になって、よがりまくってる金森さんが、悔しそうに、でも気持ちよさそうに叫ぶ。

なんて甘い声なんだろう。

そんな声で悔しそうにされると、心の底から震えがくる。

もう最高潮だと思っていたのに、チンポが想像を超えてバッキバキに硬くなってるぞ。

「友達の弟に、あふううう、年下の男子校生に、こんな醜態をさらすなんて、はあ、はあ、エモいけど、悔しいっ、悔しいけど、エモいよおツ」

ああ……マジでイイ……。

金森さんの……このオンナの、セックスのときの反応、マジ最高。

顔がよくて、オッパイが大きくて、プロポーション抜群な上に、ハメ心地が至福だなんて、女神さまかなにかかよ。

ちくしょう……。

こんなオンナと相思相愛……いつでもセックスできる男がいるなんて……オレよりチンポが劣るくせに、こんないいオンナを自分のものにしてるだなんてッ！

「ンンン、イクっ、オマンコ、イクうつ」

金森さんは、オッパイをぶるんぶるん揺らしながら、切羽詰まった甘い声を出す。

わざわざ言うところもイイ。エロい。

でもコレは、彼氏に仕込まれたのかなあ。

くそっ、くそっ……！

でも今は……今だけは、このイイオンナはオレのもの。

心だけは奪えないけど、カラダは好きにできるんだ。

ざまーみろ。

「ひとりはイヤっ、一緒にイッて、ゆっちい」

「ッ！」

オレは雷に打たれた心地になった。

強烈な電気が全身を駆け抜けたんだ。

一緒にイッて欲しいと、彼女はそう言ったのか？

このオレと、一緒にイキたいだって？

そんなの……そんなの……まるで、恋人同士じゃないかつ。

心を完全に、オレに開いてるみたいじゃないかつ。

うおおっ、マジでエモいッ。

優しいけど強気で、年下にいいようにされるのを好まないオンナが、同時絶頂をせがんできたのは、ギャップ可愛くて、興奮するし。

あーもう、ダメだ。

中出ししたい。

このオンナの子宮に精液を……精子をたんまり送り込んで、オレのものだってマーキングしたい。

誰のオンナかって、本能レベルで刻み込みたい。

でも……。

やっぱりマズいか。

勢いに乗って中出しするのは簡単だ。

それはきっと、ものすごく気持ちいいだろう。

けど、合意がないんじゃないかなあ……。

オレは膣内射精……子宮へ自分の精子をたんまり送り込む誘惑を、歯を食いしばって断ち切った。

もう限界に来てるチンポを無理矢理引っこ抜いたとき、精液が飛び出したんだ。

ドビュルルルルルル！ ドブウウウウウ！ ドビュブウウウウウウ！

水鉄砲みたいに噴出した精液は、太い一直線となって彼女に降り注ぐ。

うおっ！

こんなに精液が出るなんて、生まれて初めてだぞ。

うひょお、こんなに激烈な放出感は、マジでオレ史上初だ。

とんでもなくチンポ気持ちイイ～。

金森さんの……姉ちゃんの友達の美人金髪白肌ギャルに、精

液がバシヤバシヤかかっている。オレのこの精液は、凄まじく青臭い。まるで溶き損ねた片栗粉みたいにドロドロで重たそうだしな。部屋は暖房が効いてあったかいけど、室温にさらされてもホカホカと熱気を放っている。

そんなのを彼女は、うっとりした顔で浴びてるんだ。

オッパイが大きくて、プロポーション抜群の美人JD金髪白肌ギャルがだぜ？

「あはあああああ……ンああああ……ああ……精液浴びながら、ンン……あーし、イッちゃってるウ」

くたりとカラダを仰向けに横たえ、満足そうに彼女が呟く。すっかり汗ばみ、室内灯でキラキラ光る女体が、釣り上げられた魚みたいに跳ねてる。

ほんとにイッてるんだな……。

オナナと一緒にイクなんて、初めてのことだけど、気持ちいいもんだなあ。

よく言えば、一体感って言うのかな。

悪く下品に言えば、支配感かもしれない。

オナニーじゃ味わえない快樂だ。もっとも、これまでの彼女とのセックスの、なにかもがそうだけどさ。

童貞を捨てられてよかったぜ。

もしかしたら、一生、こんな至福を知らないままだったかも知れないんだ。



ああああアア~~~~

カレのではない
セーエキかかっているう

ドブドブ
ルルルルルル!

そう思うとゾッとする。

けど……。

ああ……。

やりたい……。

気持ちいいことは気持ちいいけど……物足りないぞ。

オレはどうしちまったんだろう。

日々のオナニーで満足してたはずなのに、女体の味を知れば知るほど、もっと味わいたい、もっと深みにはまりたいって衝動に駆られる。

もっともっと、長い時間、濃い性感に浸っていたくて仕方ない。

まだまだオマンコハメたい。

目の前のオンナにチンポを突っ込んで、悦びを分かち合いたい。

……中出ししたい。

子宮にオレの精子を詰め込みまくりたい……。

……いや。

いやいや、ダメだ……ダメだって、オレ。

それは流石に許されない。

なぜかというと、目の前のオンナが……金森さんが、そこまで許さないからだ。

無理矢理なんてダメ、絶対。

オレは、チンポを痛いほど疼かせながら、自分に強く言い聞かせる。

こりやマズイな……。

チンポはまだ元気潑刺。

不安が杞憂に終わり、一発で萎えなかったのは、よかったのか悪かったのか。

今度オマンコに入れたら、確実に中出ししちまうだろうな。

こうなったら、見抜きでヌキまくらせてもらうしかないか。

待てよ……頼めば手コキとか、してもらえるかな。

むう……柔肌に触れられたら、そのまま押し倒すかも……やっぱ見抜きしかないか。

そんなことを思いつつ、手淫するオレ。

精液をビュルビュル出しては、金森さんにぶっかける。

無防備にオーガズムに浸る美人JDのキレイな美肌を汚しまくるっ。

姉ちゃんの友達に、その弟であるオレというオスの遺伝子汁をかけまくるッ。

他の男のオンナに、自分の精液をかけて臭くするのは、背徳的な楽しみだった。

何回出しても勃起は収まらないし、精液は薄くならない。

射精歴はそれなりにあるのに、こんなことは初めてだ。

オレって絶倫だったのか……いや、相手がイイオンナだから

だな。

「ああ……信じられない……何度もあーしにかけてるのに、ぜんぜん萎えないし、精液が濃いままだなんて……これが男子校生の精力なの？ ゆっちのチンポの実力なの……？」

彼女はうっとりした声で呟く。

ただそれだけだ。

やめてと言わないし、逃げようともしない。

オレに精液をかけられて、気持ちいいのかも知れないぞ。

他の女だったら殴りかかってきそうな位、調子に乗って全身をドロドロに染めてるのに、拒絶の気配がないんだもの。

「ああ……ゆっちのエモチン……ほんとにすごい……こんなものを見せつけられたらあーしは……あーしは……」

そして彼女は……。

*** 体験版はココまでです。**

ご鑑賞ありがとうございました。

続きは製品版でお楽しみください。

姉ちゃんの友達のギャルがオレの「フレンド」になるまで

奥付

●制作● (2019 年 12 月現在)

作・絵 木森山水道 (別名義 きもりや) (サークル 夜山の休憩所)

ブログ

<http://kimoriyamasuidou.blog115.fc2.com/>

ツイッター

<https://twitter.com/kimoriya2> (きもりや @kimoriya2)

ノクターンノベルズ

<https://xmypage.syosetu.com/x5925s/> (きもりや)

ピクシブ

<https://www.pixiv.net/member.php?id=4149128> (きもりや)

ニジエ

<http://nijie.info/members.php?id=987459> (きもりや)

・挿絵

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」(G. J?社)

「セックスライフ」(G. J?社)

公式サイト <http://www.teck.jp/gj/>

利用規約 <http://www.teck.co.jp/gj/products/sano/qa/qa.html>

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」のシリアル S/N:GJ0079908

● CM ● 小生の商業作品にはこんなものがございます。

「地球警備隊ツイン・スター 不可逆の TS 孕ませ陵辱」

挿絵 きばすけ 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン 107号

「性転換孕ませ特集号」(KTC社刊)

「絶対無敗騎士キリィ・タイム」

挿絵 トモセシュンサク 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン 100号

「二次元エンド特集号」(KTC社刊)

* 100号記念号にして、内容も付録も大充実の永久保存版!

「健昂優良ビビッド・ガール 淫らな体育祭で寝取られる淫紋ヒロイン」

挿絵 sue 先生

メディア 電子書籍専売品 (KTC社刊)

「学園天使ツイン・セーフティ ～ヤリチンDK怪人 卑劣な寝取り調教作戦～」

挿絵 洗面きぬ子 先生

メディア 電子書籍専売品 (KTC社刊)

姉ちゃんの友達ギャルがオレの「フレンド」になるまで

以上はほんの一例です。

通販サイト様、電子書籍ショップ様にて、

「木森山水道」（きもりやますいどう）で是非ご検索ください。



わたしってば、スポーツが好きすぎて
変身ヒロインになっちゃった!

えっ、この星からスポーツがなくなる?
防ぐには、こんな**エロ競技**で
勝たなくちゃいけないってウソでしょ!?

あちゃー……**エロ競技**で組んだ、
転校生で**イケメン**で**ゴリマッチョ**で
アレがもの凄い**クラスメイト**に、
ちょっと**メロメロ**になっちゃったら、
幼馴染みのアイツってば、
超イライラしてるわ!

いったいどうなっちゃうのよ!?

けんこうゆうりょう (挿絵: sue先生 小説: 木森山水道)
そんな、「**健昂優良ビビッド・ガール**
淫らな体育祭で寝取られる淫紋ヒロイン」
は、電子書籍販売店さまで好評発売中♥

あなたもわたしとの**シコシコ運動**で、
キモチイイ汗かこ♥

カチツ♥
ビビッドガール 検索



ごとうとくにかんしゃ！ まだまだ好評発売中っ♡

キルタイムデジタルブレイク

検索

by「学園天使ツイン・セーフティ」
～ヤリチンDK怪人 卑劣な寝取り調教作戦～

小説 木森山水道

挿絵 洗面きめ子 先生

出版社 K T C 社

(二次元ドリームノベルズ)

(電子書籍専売レーベル)

*コメント、RT、いいねなど、
どうもありがとうございます！

画 木森山水道



色々なお店で販売中です！ 夜のお供に是非どうぞ♡

学園天使ツイン・セーフティ

検索

by「学園天使ツイン・セーフティ」
～ヤリチンDK怪人 卑劣な寝取り調教作戦～

小説 木森山水道

挿絵 洗面きめ子 先生

出版社 K T C 社

(二次元ドリームノベルズ) (電子書籍専売レーベル)

*コメント、RT、いいねなどに感謝！

既にの方もこれからの方も、

ご購入ほんとうにありがとうございます！

画 木森山水道

